

みなと・新橋

今・むかし新聞

第 7 号
平成 31 年 3 月

『戦争体験を語り継ぐ』

今回は「語り部」の皆さん、終戦直後の状況を中心に書いていただきました。

「忘れぬ校歌」

武 恒 雄

私は、昭和二十二年に、無試験で入学できるようになった中学校に入った。（大田区立御園中学校。それまでは中学校に入るための試験があった）新しい義務教育制度の制定による六・三制の第一回生と云うわけだ。

戦後の大混乱が続く社会状況の下でのこと、準備不足だったのだと、制服のままでの先生もいたし、新しい教科の指導に戸惑ったのか？教頭先生から雑巾の縫い方を習った時間があったりした。

そんな手探りが続いていた頃、全校生徒が集められた校庭で披露されたのが、校歌であった。

九月二十日制定。作詞高橋掬太郎（たかはし きくたろう）（「酒は涙かため息か」「二に幸あり」他多数のヒット曲あり）、作曲 大村能章（おおむね のつしゅう）（明治一代女）戦友の唄（同期の校）「他の作者、昭和六年日本歌謡学院創設者」による。」

西氏揃って登場し、歌唱指導をしてもいい、平易な語句と明るい曲調のもだったから、すべ全員で合唱したのを覚えている。

この先生方が高名なことは後に知ったことで、誕生の経緯は知らぬが、空っ腹かかえた者達を、笑顔にさせてくれたのは見事であると同時に、どんな環境だろうと決してめげないのが子どもなのだろう。

小・中・高と十何年かの学生生活をしたけれど、この中学校の外の校歌は全く覚えていない。

現在、カラオケでは歌謡曲が大好き！
「やっほー」と思っている。

「忘れぬ校歌」

宇 和 島 常 子

東海道線に面する私の生家は、中仙道に沿って流れる醒ヶ井・地藏川。その地藏川と中仙道とが丁度交差する



橋の袂にあり、色々な催しの中心地となっていました。そのことは、私にとって子供ながらに自慢でした。

地藏川は若山からの湧き出た清水が川幅四〜五m、水深一〜三十cmの川となり、中仙道に沿って流れています。川の水は冷たく、普通なら十秒と入っていられないような清流ですが、子供のころの私は男の子と一緒に、一日中魚を追って遊んだ懐かしい場所です。

戦争末期になると、そんな小さな静かな村にも都会から数多くの方達が疎開してこられるようになります。ある日、大きな音と共に、川のそばの柳の木の根元に何かが落ちて大きな穴が空きました。私達には何が起きたのか良くわかりませんでした。その時、名古屋から疎開で来られていた方が、

「不発弾だ、不発弾だ近づくな」

と大声で叫ぶのです。私は恐くなり姉と自宅の倉に入り、耳を塞いで半日待ったものでした。その後消防団の方々が来られ、どのように処理されたかは七才の自分には記憶はありません。

ただ、その後も名古屋のその方は少しでも何かあると大声を張り上げ大騒ぎされていたことを憶えています。今から思えば、都会で苦しい中を生き抜いて来られ、精神的に疲れておられたのでしゅ。

戦後まもなく、田舎ながらに落ち着きを取り戻し、ひととき中止されていた八月の地藏祭りが復活しました。お祭りには、日頃のニュースを取り上げた楽しい作り物や社会を風刺した作品など競って出品され、この小さな村にどこから、こんなに大勢の人が来たのかしらと思っほど大変な賑わいでした。今では、清流のその川も町内の方々の努力により更にきれいになり、

梅花藻（バイカモ）が川一面に小さな白い花をたくさん咲かせる元の美しい川に戻りました。（※醒ヶ井・地藏川の梅花藻は七月から八月にかけて白い花を咲かせる水中花。）



近くには、井伊直弼（大老）の彦根城があり、日本武尊（ヤマトタケルノミコト）が伊吹山で大蛇を征伐後、高熱で下山、この冷たい清流で体を冷やし熱が下がったと

いつ頃から、この地を醒ヶ井（さめがい）と名づけたのだそうです。今では観光バスが組まれるまでに賑わっているようです。

いつまでも大事にしたい私のふるさとです。

盗まれた「鶴嘴」

井 上 繁

『鶴嘴』この文字をどう読むかご存じですか。そう「つるはし」です。昔、炭坑などの採掘に坑夫が、鉄道ではレール下に敷かれた砂利の保守作業に線路工夫が使っていました。

その『つるはし』。戦争が終わって間もない頃、東京のと真ん中の我が家にもありました。焼け跡に建てた住居（バラック）の周辺の空き地にさつま芋やカボチャを作っていました。それを植えるために、戦災で焼け落ちた屋根瓦や残っていた土台石を取り除くための必需品だったのです。



ところで当時は少しでも油断すると何でも盗られてしまう時代でした。ある日、『つるはし』を使って作業中に、ちょっとした間家に入り、再び外へ出ると、その場に置いてあった筈の『つるはし』が無い、ほんの僅な合間に盗られてしまったのです。高張るし重い物なので遠くまで持って行く筈はないと閃いて、すぐに近くの古物商のところへ走って行くと、予想が当たり、店（といってもこれもバラック）の前の、雑多な物が並び中に置かれていました。店主に、
「これ、うちのでさ、今、ちょっと前に、持って行かれた。」
と云う。

「あ、そつなの、これこれで買ったので、そのお金を払ってくれば返すよ。」

と。柄のところにチョークで書いてあった売値の半分だけが三分の一だったか、お金を払って、取り戻したのでした。

今の人からは想像できないこのようなことが、戦争直後では普通の出来事だったのです。

「和ごし感ごない」

中 嶋 房 子

私は、昭和十一年生まれの八十二才です。遠く戦争中、昭和十八年頃を思い出しますと、町内会近所で、「あそここの家には、外に出ないお兄さんがいるのよ」等々、噂話を聞いたことがありました。

あの時代、身体に障害があることは、内密に家族で介護していたように思い出されます。

昭和十九年に茨城の笠間に、縁故疎開しました時のこ

と。

近所に大きな家の離れに、書道の先生が住んでいらっしやいました。静かなお屋敷で脳性麻痺の赤ちゃんがいらっしやいました。私たちは殆ど合つことはありませんでした。

学校から帰るとこちらのお庭を、縄跳び、石蹴り等の遊び場になっているのが常でした。

ある時、その書道の先生が、

「房子ちゃんの声がすると『まあ君』が「二」になるので、是非遊びに来てくださいなね。」

とのこと・・・以後、毎日のように学校から帰ると縁側で抱っこして遊びました。

外に出ることもなく、過「す『まあ君』・・・

先生は、

「房子ちゃんが来るの、喜んで笑顔になるのよ。」と喜んでくださいました。そして、あの『まあ君』の笑顔が今でも走馬灯のように浮かびます。

あれから七十年、時代は変わりました。

毎日障害者のニュースが流れています。障害者の環境生活、パリンピック等と待遇が改善されてきました。

世の中、人を大切にします。弱い人に対する価値観が変わってまいりました。障害ある人が家から外出することも無く暮らしていた時代から、弱い人、悲しい人がいたら、大切にする時代になってまいりました。

老いて日々体力の限界を感じますが、生きている今を楽しむことのできる日々に感謝しております。

「戦前、戦後の子供の生活の中での違い」

山 口 和 良

昭和二十年八月十五日終戦宣言。私達子供にとっても心に深い傷を負ったことが思い出されます。戦火をのがれ逃げ惑う事もなくなりました。しかし、昭和二十三年頃迄は、私達国民にとってはまだ戦前でした。

食糧物資不足、そして未だ一部の処は、焼野原で家を建てる木材の不足、「お山の杉の子」の歌にある様、はげ山の山々の風景が思い浮かびます。街には戦災孤児があらわれ、駅の構内、地下道、ビルの軒下は戦災孤児の夜の寝床でした。お米も不足しており、さつま芋が主食の様な感じでした。

新橋駅前の空き地（今はテレビに出て来る機関車の広場）は、闇市でした。お金さえあれば、ほとんどの物が手に入る処でした。

戦前の子供の遊びは、鬼ごっこ、チャンバラごっこ、べいごま、めんこ等で現在の予備校などなかった。

女子は、お手玉、千代紙の着せ替え人



形遊び、おままごと遊び、折り紙、あやとり等でした。戦前、男の子は竹とんぼなどで自分で作り遊びを楽しんだものでしたが、今の子供はデパートやお店に出来上がったもの、ちょっと高価な遊戯器類が街にあふれています。そして、戦前はみんな仲良く、グループで遊ぶ傾向が多かった様に思われますが、最近は、個々で遊ぶ傾向では？学習塾、予備校等で忙しく、仲間で遊ぶ時間もななく、今の子供達にも戦前の子供達との生活、遊びの感覚の違いが感じられます。

「飢えとの戦争」

細矢 隆 久

日本が降伏し、昭和二十年八月十五日に戦争は終わりました。が、小学校三年生の私には、これからの日本がどう変わっていくのかなどと言った難しい問題は何も分かりませんでした。戦争中の我が家のある新橋二丁目あたりから銀座、京橋方面までは幸にも爆撃に会わず、又、学童疎開で行った栃木県の塩原も山間の温泉地の静かな町なので、空襲などと言った恐ろしい思いをした事はありませんでした。

しかし、私達子どもにとって一番苦しかった事は、食べ物がいなくて毎日腹をすかせていた事でした。つまり、私達にとって戦争は飢えだったのです。私自身も恥ずかしいことですが、あまりの空腹に夜中暗い室に忍び込んで鍋に残った物を盗み食いした事もありました。

特に甘いものに飢えていて、練り歯磨きを食べてみたり、「お汁粉が食べたい、大福が食べたい」などという無理なお願いの母への手紙を、先生の目を盗んでポストに入れて送りました。（当時は、親に出す手紙も全部先生のチェックがあったからです。）

それを読んだ母は、どんなに悲しんだでしょう・・・。

もう、東京でも、材料となる小豆等はなかなか手に入りにくい状況になっていたからです。でも、母はなんとか工夫して、羊かんもどきの物を作って面会に来てくれましたが、肝心の物は、来る途中で暑さのためか腐ってしまい、食べる事が出来なかつたのです。悲しさを通り越して涙も出ませんでした。



日本の戦争は終わりましたが、私の戦争はまだまだ終りにならず、疎開先での栄養失調のおかげで疥癬と言う皮膚病に罹り、今度は草津温泉に湯治に行かねばならなくななり、桜田小学校への復学が相当遅れてしまったのでした。

直接戦争に関係のない一般の人々、婦人や子供達みんなが苦しみのない様な平和な日本国が、これからもずっと続く事を心から願っています。

「私の育った太平洋戦争の頃」

高橋 邦子

昭和十九年四月私は六才、芝浦国民学校初等科一年に入学しました。母に連れられ入学式のとき校門に、桜の花が咲いていた記憶があります。

空襲が烈しくなり、伯父を頼って栃木県塩谷郡仁井田町へ疎開しました。

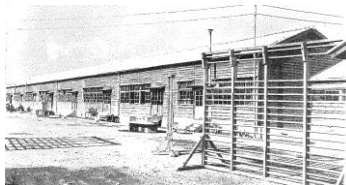
伯父は北支へ出征、父はフィリピンへ出征、農家の伯母さんの家にも三人の子供が居て。狭い家に母と五人の子供が居候することも出来ず、農家の空家一軒を疎開家族三軒で借り、馬小屋も改造して二家族が入居していました。

栃木の冬は新潟のように大雪は降らないのですが、高原山から吹き降ろす風は冷たく、母は伯母さんと一緒に芝浦の家へ布団を取りに出掛けました。私が夕方停車場へ迎えに行くと、伯母さんが大きな布団を背負い母は弟を背負い両手に荷物を下げて帰って来た姿が脳裏に焼きついています。たぐあん漬で余分な大根菜をいただいたり、放し飼いの鶏の卵や小川に仕掛けた魚籠で獲れた鮎やどじょうなど、疎開中は伯母さんのお陰で、飢餓感もなく畦道を走り廻って遊んでいた思い出があります。

昭和二十年五月二十五日の空襲で芝浦は焼野原、八月十五日終戦。いつまでも田舎に疎開していると芝浦の土地に他人がバラックを建て住んでしまします。母は親戚の世話で材木を調達し、バラックを建て私達子供は芝浦へ戻る事が出来ました。

配給があっても足りず、母は兄と一緒に着物を持ってお百姓さん宅へ買出し、一升位のお米を持ち帰っても駅で、ヤミ米一斉取締りで没収、当時占領下芝浦は、アメリカのジープが走っていました。日本人の輸送手段は荷馬車、馬を繋いだ家には、ヤミ米を売っていました。フィリピンから復員した父が働いて得た日当のお金でヤミ米を買いに行きました。配給では、トウモロコシやさつま芋の粉でパンを焼いた事もあります。栄養状態が悪く、疥癬という皮膚病にかかりました。衣類には、のみ、しらみがたかり、お釜にお湯を沸騰させて熱湯消毒をした時期もありました。

芝浦小学校も焼失、急遽建てられた木造平屋建ての校舎も疎開から帰った児童で溢れ、午前と午後の二部授業、南海小学校（現三田図書館）の校舎も借りました。給食は豆腐物資（スキムミルクのよつなも等）。



最近思うことは、中村草田男の『明治は遠くなりにけり』ではありませんが、『昭和は遠くなりにけり』敗戦後の思い出を語る私達世代も桐ヶ谷のお世話になり土に返って行きます。保育園や幼稚園の

世話にもならず、焼跡で遊んでいた幼い日々、育ててくれた父母の苦勞を思う時、戦争はしてはいけない平和の尊さを痛感します。

「炎の夜」

池田 林太郎

その夜は三月十日、国民学校二年生を終える時期でした。

「急いで防空頭巾を被りなさい！」と母に言われ、妹達と共に外に出ると、すでに鳴り響く空襲警報のサイレンを消すようなアメリカのB29が飛来する爆音が大きく聞こえていました。



父は軍需工場に徴用され不在のため、予てから指示を受けていた避難所の『第一ホテル』を目指し母子共々急ぎました。夜空にはB29の機体がキラキラ輝き、日本橋方面は焼夷弾が花火の束となって降り注いでいました。ホテルに着く間、空は赤く染まり建物や道路は煙のように見えました。

浅草橋、上野の親戚の家は焼失しましたが我が家は被害を受けずに残りました。

しかし、四月には新橋駅、汐留駅を延焼から守るこの理由により強制疎開命令を受け、母と妹達は地方に縁故が無かったので草津温泉の旅館の一室を借り受け泣く泣く疎開しました。父は工場の寮生活、私は集団疎開との三方に離散生活を送ることになりました。

父が苦勞して築いた店舗、住宅は軍により破壊されて備品類は供出との美名により持ち出されたと後で聞かされました。

戦争は権力者が国民と弱い立場のものを犠牲にして成り立っているものです。

ですから、絶対に戦争をしないことを全世代の人々に守って欲しいと願っています。

「戦後の風景」

神代 忠男

私は現在九十六才。昭和十八年十二月、大学をあと十ヶ月で卒業といつとき、所謂「学徒出陣」として「仮卒業」なる名で軍隊に入れられました。それでも運良く、ずっと内地勤務で命を長らえ終戦となりました。

但し軍隊から復員しても自宅は空襲で全焼、東京の街も焼け跡ばかり・・・戦争中の空襲或いは南方での大量の戦死等、大変なことでしたが、それでも戦争中は、日本人はなんとか祖国の為頑張ろうと言った精神に支えられて居りましたが、敗戦と同時に日



本人の心に、「日本の今後は如何になるのか？米国の植民地になるのか？又個人の生活もこの敗戦の現実を如何に考えて今後生活して行くべきか？等々色々悩み、其の意味では戦争中よりも戦後の二・三年間は日本列島大混乱時代でありました。

私はそこで今後の日本の向い方が見定まる迄、大学で過ごしたいと考え、大学に行き「十ヶ月早く卒業させられたから再入学させてくれ」「君は卒業証書が出ているから駄目！」「それなら聴講生として入れてくれ」「当大学は戦災により教室が半減しているからその制度は中止している」との事。

「それなら就職の世話を！」「戦争が終わったばかりで企業から就職依頼一件もなし！」

仕方なく私は毎日、新橋島森付近でうろつろ。何とかあの混乱期の戦後を過ごしたものでした。

やっと友人の紹介で戦後復興の一翼を担った石炭の全国配給をしている「日本石炭株」なる大企業に就職出来たのは戦後二年近く後のことでした。

そして、日本は米国の植民地とならず、その後の日本人の勤勉ごと、又、朝鮮動乱の勃発等の幸運に恵まれ、意外と早く再び世界の大国の仲間入りが出来ました。

或る意味戦後のあの景色を生きた者にとっては、現在の日本の繁栄は全く夢のようであり、今後ともこの我国の繁栄を続けていって貰いたいと、切に望むものであります。

「はるーんの『語りの部』ってなあに？」

平成十三年「生涯学習ボランティア講座」事業として、生涯学習センター内桜田小学校記念室に、新橋界隈を中心とした区民の方々が集まり「昔の港区」の学習会を行っています。

平成十五年度からは、また小学校の学習支援活動として、語りのメンバーが小学校に出向き、子どもたちにいろいろな昔の話をしています。

地域の歴史や暮らし、また戦争の貴重な体験など、過去を風化させずに未来へ語り継ぐことが大切であると考えているからです。

ぜひ、興味のある方は、はるーん「語りの部」担当までご連絡ください。

発行・問合せ

住所 〒105-0004 東京都港区新橋三十一番三

電話 03-3431-1606 FAX 03-3431-1619

公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団

港区立生涯学習センター（はるーん）